

宮城方言「だから」による同調の行為連鎖

— 類似する同調表現「んだ」との比較から —

阿部春香(筑波大学大学院生)

1. はじめに

日本語の共通語において、「だから」は理由や因果関係を示す接続詞として使用されている。しかし、本研究での分析対象である宮城方言の「だから」は共通語における用法だけではなく、同調表現としても使用されている。本研究では、宮城方言話者が使用する同調表現「だから」に焦点を当て、会話分析的手法を用いて、その相互行為的機能を明らかにすることを目的としている。本発表では、宮城方言において「だから」と同様に同調表現として使用される「んだ」との比較から、宮城方言「だから」が産出される連鎖環境の特徴を明らかにしていく。

2. 先行研究

本発表で焦点を当てている「同調」は、会話分析の文脈では”alignment”または”affiliation”として理解されている。Stivers(2008)は物語を語る場面において、聞き手の continuer として働き、話し手の話を先に進めるような反応を alignment として説明をしている。その概念は affiliation との対比によって、物語を語る場面だけではなく、相互行為全般に通じるものとしてさらに整理されている。Stivers(2011)によれば、alignment は、直前の活動や行為を先に進めることを促すとし、直前の活動、行為において示されている前提や条件を受け入れ、先行するターンのデザインと一致させるという点で協力的な行為であるという。一方の affiliation は、感情的スタンス(affective stance)のレベルにおいての協力を指すものだとしている。相手の評価的スタンスと一致して、共感を示し、かつ先行する行為に協力した場合に、affiliation は最大になるという。この affiliation には、先行話者の感情的スタンスへのサポートを示すかどうか、その応答自体が直前の行動と一致しているかどうかといった2つの側面が大きく関わってくるといわれている(Stivers, 2011)。本発表で示す宮城方言の「だから」と「んだ」が使用される連鎖環境の差異は、その同調が alignment なのか affiliation なのかという点において大きく関わるものだと見える。

3. データの概要

本発表では、宮城方言話者同士による電話・対面会話を分析している。データは2018年から2022年にかけて収集されている。相互行為は、親子間、友人間、親戚間など様々な間柄で生じたものを録音、録画しており、いずれの参加者も初対面ではなく既知の間柄である。相互行為場面も食事中や走行中の車内などデータによって異なっている。データの協力者たちはみな言語形成期を宮城県内で過ごしている。

協力者たちには事前に研究に関する説明を簡潔に行い、承諾書への同意も得ている。分析の焦点となる宮城方言の「だから」による同調は全部で20例であった。

4. 分析

本章では、宮城方言の「だから」「んだ」がそれぞれどのような相互行為環境において使用されているのか、前後の連鎖を詳しく見ていくことで明らかに示していく。

4.1 「んだ」の連鎖環境

断片1は、母親であるM、その娘のLとDの会話である。Mは車を運転しており、助手席にD、後部座席にLとB(断片には出てきていない)が乗っている。買い物を終え、帰路についている際に撮られたデータで、断片の直前にMは断片で言及されているパン屋に行こうと話していたものの、帰路が大変になるのでやめようと話していた。この断片はMが行こうとしていたパン屋の前を車で通過しようとしている際の会話である。

断片 1

- 1 M: いづがらやってんだい. =4日がらだつて::.
 2 (0. 5) (Dがうなずく)
 3 L: ()=
 4 M: =なん↑だいパン屋ずいぶん休むごだ::.
 5 D: 休ませてあげよ.
 → 6 M: んだね

この断片で宮城方言の「んだ」は6行目に産出されている。1行目に至るまでに、会話者たちは行こうとしていたパン屋が店休であることを認識している。信号待ちのために車を停車させると、1行目でMはパン屋の方に視線を向けながら「いつから店が再開するのだろう」と発話し、「4日がらだつて」と、視線の先から得たであろう情報を車内で共有する。この報告に対して、Mと同じくお店のある方向に視線を向けていたDはうなずき、Mの報告を受け入れる。Mは4行目で「なんだい」と驚きを示すような発話から産出を組み立て、「ずいぶん休む」と休む期間が長いというMの評価的なスタンスを示す。「ずいぶん」という表現に加えて、「なんだい」の音調が途中で上がっており、Mはパン屋が長い期間休むことに関して単純な驚きというよりも、長く店を休むことに対して批判的なスタンスを示しているといえる。それに対して5行目でDは、「休ませてあげよ」と4行目でMが示した批判的なスタンスとは異なり、「休むべきである」とパン屋側に寄り添った発話を産出する。それに対してMは6行目で「んだね」と産出し、5行目Dの発話を受け入れている。

6行目で産出されているMの「んだね」は、直前のDの発話に対する同調として聞くことができる。この断片では、Mは4行目で1月1日から4日まで休んでいるパン屋に対して、「お店の休業が長すぎる」と顧客の立場から店側に対する批判的なスタンスを示していた。それに対して、Dはお店を擁護するスタンスを示しており、Mの店側への批判的な発話に非同意をしている。会話者間のスタンスの違いが明らかになった6行目でMは、Dの発話を「んだね」によって受け入れ、「休ませるべきだ」という直前で示されたDのお店の休業期間を擁護するスタンスに同調をする。そうすることによって、Mの「お店の休業が長すぎる」ということに対するスタンスは、まさに今ここにおける5行目Dの発話によって変化したのだということを明示しているといえる。

4. 2 「だから」の連鎖環境

断片2は宮城方言の「だから」が産出された事例である。友人同士であるAとNの電話会話で、録音当時Aは大学院生、Nは新社会人であった。AとNはともに宮城県の出身だが、録音時Aは茨城県、Nは福島県に住んでいた。この断片の直前でAはNに新社会人としての生活はどうかと尋ねていた。それに対してNは、雇用試用期間であるにもかかわらず残業する可能性があることを示唆し、大変だと語っていた。Aも社会人は学生と違い、大変だという評価的発話を断片の直前に示していたものの、断片2の1行目で、忙しくてもNの方が実家の宮城には帰省しやすいだろうと主張している。

断片 2

- | | |
|--|-------------------------|
| 1 A: まあ:でも-でもまあ郡山(.)み-宮城に近いか | 20 A: うん |
| 2 ら° まあまあまあ::° | 21 N: >なんだろく上司の人たちは::, |
| 3 N: <u>そう</u> 思うけどさ:, なかなかさ:: h 現状では帰 | 22 A: うん |
| 4 れる気がしてないんだよね:. | 23 N: まる一日そこにいるし::, |
| 5 A: ° まあ° -くでも残業するくらいの業務だった | 24 A: わ:: |
| 6 ら hh> | 25 N: hh 土日どっちもいるみたいなの。 |
| 7 N: そうそうそう[:昨日もさ:普通に= | 26 A: ↑え::: |
| 8 A: [うん | 27 N: 休みなんてないみたいなの感じ。 |
| 9 N: =休日出勤でさ::, | 28 (1. 0) |
| 10 A: うわ:: | 29 A: え-え↑:: [やばいねそれ |
| (11-18行目省略) | 30 N: [恐ろしい(でしょ) |
| 19 N: =結局課長以上とか | → 31 N: だ↑から::: |

断片2では、31行目にNによって「だから」が産出されている。この断片では、Aの忙しくともNは宮城の実家に帰省しやすいだろうという主張(1行目)を受けて、Nが3行目以降で自身の置かれている状況を語っている。Nは語りを通して、1, 2行目Aの主張が受け入れ難い理由をAに示すと同時に、具体的に自身の実情を語ることを通してAに

「Nの仕事の忙しさ」に関するより正しい理解の提示を試みているといえる。27行目までのNの語りに対して、Aは29行目で「やばいね」と評価的なスタンスを示し、それに対してNは31行目で「だから」を産出している。

この断片2において注目したいのは、「Nの仕事の忙しさ」について語りを産出していたNが「だから」を産出しているという点である。この断片において「だから」が同調を示しているのは、29行目Aの評価的発話である。そして、この29行目の発話は、さらにその直前である27行目までのNの語りを受け、語りの中に示されたスタンスへの同調を示すように産出した評価的発話である点にも着目されたい。

まず、Nは7行目から、語られる出来事が「昨日も(7行目)」と最近続いていることであること、そして「休日出勤(9行目)」であることを明示的にして語りを組み立てていく。さらに、「課長以上(19行目)」「上司の人たち(21行目)」など具体的な役職を示し、その上司たちが休日出勤していることを述べる。その際、Nは「丸一日そこにいる(23行目)」「土日どっちもいる(25行目)」と職場における上司たちの拘束時間の長さを極端なもの(extreme-case)(Pomerantz, 1986)として産出し、Nの「上司が休日出勤をするほど業務があり、忙しい」という職場の現状を明示的にしている。さらにNは「休みなんでないみたいない感じ(27行目)」と自分の仕事の忙しさをたとえ、N自身の驚きと、休みがないほどの業務があることを示しているといえる。NはAに、自身がまだ雇用試用期間であり、その間は残業を本来してはいけないことを伝えていた。これを踏まえると、このNの語りとその発話の組み立ては、仕事の忙しさに関する正しい理解をAに促しているだけではなく、「雇用試用期間であるNも休日出勤が必要な程に忙しい」という仕事量それ自体の異常さを強調しているともいえる。その語りに対して、29行目でAは、Nの語りを理解したうえで驚きを「え-え↑::」によって示し、「やばいねそれ」とNの現状が普通ではないというように評価を示す。この29行目Aの発話は、N自身の「仕事量が異常である」というスタンスに同調した発話だといえる。

つまり、この断片2でNは、語りを通してNの「仕事の忙しさ」に関する正しい理解をAに促しつつ、併せて「異常な仕事量」による忙しさであることを強調する。それに対してAは、Nの「仕事の忙しさ」の理解を示しつつ、強調されていた「異常な仕事量」にも同調を示す形で29行目を産出する。そして31行目でNはNの語りに同調して産出されたAの発話を「だから」によって受け止めている。つまり、31行目で「だから」を産出したNは、「だから」によって受け止められた直前の発話(29行目)が同調を示している、さらにその直前の語りを通してN自身のスタンスを既に示しているのである。「だから」の産出者であるN自身の先の発話に同調する発話が産出され、その発話に対して「だから」でさらに同調を示すという連鎖構造になっているといえる。

断片3はHとSの友人同士の対面会話である。Sは車を運転し、Hは助手席にいる。この断片で2人はショッピングセンターを出た後、次の目的地を決めかねたまま車を走らせている。Hは断片の前から何度か次の目的地候補を挙げていたが、いずれもSに受け入れられていない。9行目で言及されている「コバルトライン」は以前、S、Hと共通の友人ミノルの3人で夜にドライブに行ったことがあった。

断片3

6	H: え: グルグル回って¥テキト: に車で¥	14	[=ミノルの. >しかもくあだしの車=
7	(2.0)	15	H: [.h グロッキ: :hh
8	S: ° ね: .° だご: :?	16	S: 鹿どぶつかりそうに[なっし¥
9	H: え¥コバルトライン行く: ?¥hhh	→ 17	H: [↑だ(h)か(h)ら(h)ね
10	(. .)	18	(h):hh
11	S: ¥酔う↑::[: ¥	19	H: [.h>あれマジでビビったんだけどく
12	H: [hhahahah	20	S: [まじ-
13	S: ¥あたしグロッキ: : なっっちゃうから=		

この断片では17行目に「だから」が産出されている。Hは6行目で今できることの候補として、適当に車を走らせることを提案するものの、Sは間合いの後、場所の明確化を求め、明確にその提案を受け入れることはしない。Hは場所の明確化要求に対して、9行目で「コバルトライン」と具体的な場所を産出する。それに対して、Sは若干の間合いの後、その提案への反応(そこに行った場合の症状)を産出する。10行目以降のSの振る舞いは、それまでのHの「提案」を明示的に受け入れるというものではない。そのためSはHの提案を拒否しているといえる。しかし、Sがそこに行った場合の具体的な症状や、過去の出来事の発話に対して、17行目でHはSの発話が完結するよりも早く「だからね」と産出し、Sの16行目の発話に同調を示している。つまり、Hは提案を拒否しているSの発話を「だからね」によって受け止めているのである。

9行目からのやり取りを詳細にみていく。Hは9行目で「コバルトライン」という場所を端的に産出し、「コバルト

ライン」がSには説明なしに理解可能な場所として扱っているといえる(Sacks & Schegloff, 1979). 切り詰めた形, かつ笑いを伴ったこの場所の提示は, この時点で「コバルトライン」が「単純な次の目的地の候補」としてだけではなく, Sとの共有可能な「面白い何か」がある場所として示されている. SもHの振る舞いを問題にすることはせず, 11行目では「酔う」とそこに行った場合の具体的な症状を笑顔で産出する. さらにSは「グロッキーになる」ことと併せて, Sの車が鹿とぶつかりそうになったという出来事も産出する(14, 16行目). この出来事は実際にS, Hとミノルの3人でコバルトラインに行った際に起きた出来事である. Sはこの出来事を, 9行目Hの発話と同様に背景説明をせず, 切り詰めた形で笑顔と共に産出する. このことから, Sにとってもこのコバルトラインに関する出来事が, Hにとって説明なしに理解可能であるというSの認識を示しているといえる. Hは, 鹿とぶつかりそうになったという出来事が産出されると笑いととも, TCU 完結前にも関わらず「だからね」によってその発話に同調を示す. このことから, HもSの語っている出来事に問題なくアクセス可能であり, かつ独立的なアクセスがあることを示しているといえる(Pomerantz, 1985).

このように, Hは9行目で笑いとともに具体的な場所を提案し, その場所に何らかの笑える出来事があること, それがSにとってもアクセス可能であることをまずは示していた. そしてSも「コバルトライン」に関する経験を具体的に, かつ笑顔で産出することで, Hが9行目で非言語的に示していたコバルトラインに関する「笑える何か」が理解可能であること, それが2人の共通経験であることを示していた. つまり, 9行目Hの「提案」に対して, Sは11行目以降で「拒否」をする一方で, SはHが「提案」の際に笑いを伴うことで示していた「コバルトラインに関連した面白い出来事がある」というスタンスには, Hとの共有経験を具体的に語りだすことを通して同調を示しているのである. この断片3における17行目の宮城方言の「だから」はまさに, Sが, 先にHが非言語的に示した「コバルトラインに関連した面白い出来事がある」というスタンスへの同調を言語的に明確化する発話がなされた時点で産出されている. 17行目の「だからね」による同調は, Sの語った出来事がまさに, Hの「コバルトラインに関連した面白いできごとがある」という自身が先に非言語的に示していたスタンスに同調するものとして受け止め, それに対してさらに同調を示したものだといえる. すなわち, 断片3も断片2と同じ連鎖構造になっているといえる.

5. まとめ

断片の分析から, 宮城方言の「だから」と「んだ」によって同調を示している先の発話の連鎖を詳しく見ていくことで, それぞれが産出される連鎖環境が異なることが明らかとなった. まず, 宮城方言の「んだ」は「んだ」で同調を示している先の発話が, さらにその先の発話に同調する発話でなくとも構わない. そのため, 宮城方言の「んだ」はあくまでもその直前の発話への同調であることが強調され, その直前のさらに前の発話における出来事へのスタンスが異なっても問題はない.

一方で宮城方言の「だから」が同調している先の発話は, さらにその前の発話(「だから」産出者の前の発話順番)に同調して産出されている. つまり, 「だから」の産出者がある出来事・ものへのスタンスを既に示し, それに同調を示した発話を, 他の会話参加者が産出した場合に産出されるのが宮城方言の「だから」である. さらに, この宮城方言「だから」産出者の先の発話順番におけるスタンスは, 非言語的資源によって示されることも多い. その際, 次の発話順番では, 非言語的なスタンスをいかに理解したのか, 言語的に明確化されるというのも注目すべき点である. このように, 宮城方言の「だから」は「んだ」が産出される場面よりもスタンスの一致作業がより複雑に構成されている. 会話参加者はスタンスをどのように示され, どう同調をしていくのかという点において, 宮城方言の「だから」と「んだ」は繊細に使い分けられているといえる.

参考文献

- Pomerantz, A. (1985). Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson (Ed.), *Structures of Social Action* 57-101. Cambridge University Press.
- Pomerantz, A. (1986). Extreme case formulations: A way of legitimizing claims. *Human Studies*, 9, 219-229.
- Sacks, H. & Schegloff, E. (1979). Two preferences in the organization of reference to persons and their interaction. *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*. 15-21.
- Stivers, T. (2008). Stance, Alignment, and affiliation during storytelling: When nodding is a token of affiliation. *Research on Language and Social Interaction*, 41(1).
- Stivers, T. (2011). Knowledge, morality, and affiliation in interaction. In Stivers, T., L. Monada, and J. Steensig. (Eds.), *The Morality of Knowledge in Conversation*, 156-183. Cambridge University Press.